千雨の夢

メル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
千雨の夢

【Ｎコード】
Ｎ０９８８ＢＡ

【作者名】
メル

【あらすじ】
果たして夢を見ているのか、今までが夢だったのか・・・
千雨魔改造ものです

夢の始まり

「長谷川さん。　長谷川さん！」

この良く出来た夢は、一見なんてことはない、良く晴れた春の教室の一室から唐突に始まった。

「・・・んぁ？」

名前を呼ばれて顔を上げれば、教壇の上から女の先生が教科書と教鞭を持ってこちらを見つめていた。
ジャージ姿で教鞭を持つその姿を見て、小学校かよ、と思わなくもないが、変人揃いのこの麻帆良だ。十分許容範囲どころか、ど真ん中ストライクだろう。
それに実に動きやすそうだ。おそらくもう少し反応が遅れれば私の机の元へ向かってきただろうことは容易に想像できた。

「長谷川さん！　先生がいま何て言ったか聞いていましたか？」

いけない、ボーっとしすぎたか。周りを見なくてもクラスメイトの視線が突き刺さっているのが感じられた。やばい、赤面ものだ。
いや、この程度このクラスじゃどうってことないのはわかってるけど、私には私のアイデンティティってのがある。
急いで何か返答しないと、えーっと、そもそも今は何の授業だったか・・・？
机の上の教科書が開いているページは、っと・・・

「もう、やっぱり聞いてなかったのね。もう一度聞きます、”ななのだん”は覚えてきましたか？」

「・・・は？」

開けっ放しの窓から入ってきた風が、机の上の教科書を数ページ戻らせる。
そこには　”はじめての九九”　と書いてあった。

「・・・は？」

それは、一見とても甘く優しい夢。そう、夢を見ているのか、夢から覚めてるのかのも分からなくなるくらい、甘い甘い蜜のような夢だった・・・。
千雨の夢　はじまります。

ってモノローグっぽいこと言ってる場合じゃねぇ！　七の段！？
七の段って九九のあれだよな！？
なんだ、とうとう小学2年生からやり直しになったのか！？　1年生からじゃかわいそうだから1年オマケしてやるよってか！？　うれしくねーよ！！
バカレンジャーだけつっこんどけばいいじゃねーか！
いや、それよりとりあえず七の段だ、落ち着け、確かに七の段は九九の中では鬼門だ、私的には最大の難関だった。っつーか語呂合わせ的なあれで答えりゃいいのか？
しちいちがしちしちにじゅうし、って言っていけばいいのか！？

「長谷川さん、ほら、しちいちが・・・」

しってるわボケー！！　わざわざ隣から教えなくてもいいって！

誰だ、綾瀬か！？

「高町さん、教えちゃダメですよ？　ちゃんと十分で覚えないと意味が無いんです。」

高町さん！？　高町ってだれだよ！？　てか良く見たらガキしかいねー！？　さすがに龍宮は無理があったか！？　鳴滝姉妹がその辺にまざってねーか！？

ってか私だって無理があるわ！！

いや、待て、七の段だ、落ち着け、とりあえず七の段だ。こういうときはあれだ、まず慌てず騒がず七の段で立ち上がって、しれっと七の段を答えて座っちまえばいいんだ。

よし、まず椅子を引いて、立ち上がって、七のって何だこの視界？

妙に低くねーか？

まるで身長が３０センチくらい縮まったみてーな、って・・・

身長が　　本当に　　縮んでやがる

やばい　　どーなってるんだ　　これ？

「は、長谷川さん！？」

私は、意識を手放した。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」

掛け布団を蹴り飛ばし、勢い良く起き上がる。心拍数は最高記録を絶賛更新中で、息は喉が裂けるのではと思うくらい荒く、全身汗でびっしょりと濡れて。

1分か、2分だろうか、兎に角起きたまま固まっていたが、すこし落ち着いたところで辺りを見回す。

まず目に入るのはいつも寝ている自室のベット。次にコスプレ衣装が入っているクローゼット。そしてデスクの上に置いてあるパソコン、カメラ、部屋の隅に固められた撮影機材。

そこは既に1年以上を過ごした寮の一室だった。

「良かった・・・！　夢落ちでホントットに良かったぁ・・・！！」

やっぱあれか、最近流れてる学年最下位だと小学生からやり直しって噂、あれのせいか！

いくら麻帆良でもそこまでしねーだろ、とは思っていたけど、心のどっかではあれを信じてたのか。で、夢に出たと。

くそ、ここにいるかぎり安眠もできねーのかよ・・・！

「ちっ・・・はぁ。・・・シャワーあびよ」

・・・まぁ、それもいまさらか。登校の準備しねーとな。

今日も最低の一日になりそうだ。

「あー、ねみぃ・・・。」

昼休み。ふつーに一人で飯を食って、休み時間はまだあと３０分くらいある。
睡眠時間はいつもと同じくらいだけど、あの夢のせいか眠くて眠くて仕方ない。

「おや、いつにも増して眠そうですね、長谷川さん。」
「ん・・・綾瀬か。」

伸びをしたり目の周りを揉んだりと、なんとか眠気を撃退しようと格闘してたところ、隣の席の綾瀬が話しかけてきた。
こいつは２Ａの中でもまだ話せるほうだ。とは言っても比較的、という程度でしかないが。

「今日は夢見が最悪でな、ぜんぜん寝れた気がしねーんだ。」

まぁでも友人の範囲に片足の先が入り込む程度には喋る仲でもある。
ほかの連中が濃すぎるだけに、綾瀬も一歩引いた位置によくいるためだ。

「午後一番は新田先生の授業です。ある意味眠気が覚めるかもですが、何なら授業前に起こすので一眠りしてはどうですか？」

新田か・・・。新田の前で眠そうにしてたら朗読や感想なんかをわ

ざわざ当てて来そうだな。
ここは綾瀬にあまえるか。

「あー、悪い。それなら寝させてもらうかな。」
「ええ、眠気覚ましの飲料も用意しておくですよ。」
「いや、それは・・・いい・・・」

こいつの飲み物は・・・変なの・・・ばっかりだから・・・な・・・

「おや。本当にすぐ寝たです。そんなに夢見が悪かったですか。」
「ゆえー。炭酸コーヒーのトマト味しかなかったよー？」
「いえ、あるいみお誂え向きです。どうですか、のどかも？」
「わ、わたしはオレンジジュースでいいやー。」

「・・・ん？　布団？」

・・・あれ、なんで私横になって寝てんだ？　机で寝てたような。
それにここは・・・保健室？

「あー、長谷川さん！　起きたの？　大丈夫？」
「ん・・・えっと、高町さん？」

またこの夢か！

明晰夢？

つまりこれはあれか？　明晰夢ってやつか？
夢の中で夢だと自覚できてるんだし。あれって行動も好きに出来る場合もあるらしいが・・・

「もー！　急に倒れるから心配したんだよ！？」
「いや、ごめんね高町さん。」

どうやら今回は見てるだけらしい。こうなると普通の夢と何も違わないよな。
起きた時に無駄にドキドキしたりビックリすることが無いくらいか。
恐らくこれはさっきの夢の続きで、倒れた私は保健室で寝かされたんだろう。
で、隣の席の高町って子がこうして着いてくれているってところか。
付き添ってきたのか、授業が終わってから様子を見に着たのか、かな。

「高町さんはどうしてここにいるの？」

お、私ナイス。まさしく聞きたいことを。

「えっと、長谷川さん起きた時に一人じゃ寂しいかなっておもって。」

てへっなんて感じで首を傾げながら笑いかけてきやがった・・・！
ガキだけど、優しくていい子なんだろうな。そして天然だ、間違いない。

「そ、そう・・・。でも、いいよ。私に付きまとわないで。」
優しくていい子なら、２Ａのやつらも大概そうだ。けど、あいつらと私じゃ絶対に合わない。
友達以上の付き合いなんてできっこない。だから、きっとこの子も・・・

バンッ！！

「ちょっと長谷川！！　せっかくなのはが心配してるのに、なによその言い方！！！」

と、突然大きな音を立てて保健室の扉を開き、金髪の少女が怒鳴り込んできた。
いいんちょタイプか、基本は抑えてるんだなこの夢は。
高町、なのは？　が、保険委員か？　だとすると次に出るのは風紀委員か。

「アリサちゃん、怒鳴っちゃだめだよ！」

あー、図書委員か。はずした。

「でもだってすずか、なのはが昼休みずっとここにいるのに、あの言い方は無いじゃない！？」
「にゃはは、私は別に気にしてないんだけど・・・。でも、同じクラスの友達だもん、ちょっとくらい一緒にいてもいいよね？」
「友達なんて、いらない。」

このアリサって子が言ってるのはまったくの正論だ。あーあ、夢の中でまで私の環境は変わらないのか。

どれだけ仲良く友達付き合いしようとしたって、所詮私が私に嘘をついて、上辺だけの綱渡りのような友情しか生めやしない。それならいっそ友達なんていらないさ。その方が楽だ。

「友達が要らない？　何でそう思うの？」

図書委員が・・・じゃない、すずかだったか、が理由を聞いてきた。その後ろではアリサが高町に取り押さえられている。ますますいいんちょだな、アリサ。

「だって、みんな私のこと嘘つきっていうから。」

それについてはもう諦めた。人が車より早く走ろうが、１００ｍを超える木が普通にはえてようが、ロボットが歩き回ってようが。だれも気に留めないどころか、当然だと思ってやがる。
そんな中一人で騒ぐのには、もう、疲れた。
あーあ、夢の中で、ガキ相手に何いってるんだろうな、私。

「あんたの何が嘘つきだっていうのよ！　ためしに何か言って見なさいよ！」

ためしに、ねぇ・・・。じゃあー

「１００ｍを超える木が観光名所になってない」
「えっ？　えっと、世界中から観光客が来ると思うけど・・・」

ん・・・？

「恐竜ロボットが走り回ってた」
「はぁ？　立ち止まって手と首と顔を動かすくらいがせいぜいでし

ょ？」

あ、あれ・・・？

「車より早く走る人がいたんだけど・・・」

「にゃはは、さ、さすがにそれは嘘って言われると思うなぁ・・・」

あ、そうか、これは夢だから・・・

「あんた、わざと変なこと言って私たちを巻こうとしてない？」

「・・・うん、変なこと、だよ」

「ちょ、ちょっと長谷川さん！？　なんで泣いてるの！？」

ここは麻帆良じゃないんだ・・・。ひょっとして、これは私が望んだこと、なのか。

「高町さん。」

「え、な、なに！？」

「ごめんね、失礼なことといって。」

「・・・！　ううん、あ、名前で呼んでくれたら許してあげる！」

「まったく、いつものが始まったわ」「なのはちゃんらしいね」

「・・・なのは？」

「うん！　千雨ちゃん！」

この夢の中でなら、私は自由に友達を作れるのかもしれない。

所詮夢だけど、そんな気がした。

キーンコーンカーンコーン・・・

「あ、お昼休み終わっちゃう！」

「長谷川、あんたはお母さんが迎えに来るらしいからまだ寝てなさい！」
「じゃあまた明日ね、千雨ちゃん！」
私は涙を流しながら、手を振って3人を見送った。
その後、母親が迎えに来て、一緒に手をつないで家へと帰った。

「倒れたらしいけどずいぶん嬉しそうね、千雨？」
「うん、友達ができたの！」
「そっか、良かったわね。」

夢の中の母親とこんな会話を交わしつつ。
つーか、そろそろ醒めるべきじゃね？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0988ba/

千雨の夢

2012年1月2日09時47分発行